

肥後における装飾古墳の展開

Origins and Development of Decorated Tombs in Higo
(Kumamoto Prefecture), Kyushu

高木正文

はじめに

①加飾された石棺について

②八代・天草の装飾古墳

③肥後中・南部丘陵の装飾石棺

④宇土半島の装飾古墳

⑤肥後中部の直弧文を施す装飾古墳

⑥熊本平野南部の装飾古墳

⑦熊本平野北部の装飾古墳

⑧菊池川下流域の装飾古墳

⑨菊池川中流域の装飾古墳

⑩菊池川上流域と阿蘇谷の装飾古墳

⑪諏訪川下流域の装飾古墳

⑫菊池川下流域の装飾横穴墓

⑬菊池川中流域の装飾横穴墓

⑭球磨川中流域の装飾横穴墓

⑮まとめ

おわりに

【論文要旨】

装飾古墳の研究は、多くの人が手がけ、多くの論考が発表されているが、年代観が研究者により大きく異なり、あまり進展がみられない。それは編年的研究の遅滞に起因していると思われる。

肥後（熊本県）では、全国で最多の190基程の装飾古墳が確認されており、装飾古墳研究上重要な所である。本稿では肥後の装飾古墳について、石室構造と装飾文様の両面から新旧関係を明らかにし、各地域ごとに編年を組み立て、それらの相互比較からその初源地とそこからの波及状況について提言する。

概要を述べると、初源地は肥後南部の八代市で、横穴式石室の石障や箱式石棺の内壁に鏡とみられる円文を彫刻したもので、円文以外に弓・靱・短甲・直刀などもあり、5世紀前半に位置づけられる。その後、装飾古墳は天草や宇土半島へと分布域を広げ、5世紀後半にはさらに北上して熊本市の北部まで広がりをみせる。それまで彫刻文に赤の彩色のみであったのが、この段階で青や黄の彩色も加わり華麗な装飾になる。6世紀に入ると、肥後北部の玉名市や山鹿市付近にも装飾古墳が出現する。横穴式石室の奥に設けられた石屋形を中心に装飾が施され、装飾も線刻文を彩色したものや彩色のみで描いたものへと変化する。この肥後で発展した装飾古墳は、肥後独特の石室構造と共に九州北部地域へと広まり、6世紀中頃には新たに大陸の思想の影響を受けた装飾文も付加されるようである。さらに九州の装飾古墳が日本列島各地の装飾古墳造営に影響を与えたものとする。